

# 歩行空間の景観構成要素と心理評価構造 の定量化に関する研究

法政大学 ○ 中戸宏幸 長野澄子  
 法政大学 正 渡部與四郎 宮下清栄  
 住・都公團 高橋賢一

## 1. 研究の目的

わが国は高度経済成長期において急激な都市化に対応するため、公共投資によって社会資本の中で特に道路などの整備に追われてきた結果、画一化された個性のない都市を創り出してしまった。また、近年国民の生活環境の向上を要求する気運が高まりつつある中、まちづくりにおいてアメニティの面から捉えることは必要となってきた。そこで、第一歩としてアメニティの重要な要素である都市景観について考察する。市民参加型のまちづくりを目指して、武蔵野市を研究対象地域に選定し、景観構成要素と心理量との関係を定量的に把握し、今後の景観整備の方向性・指針また景観整備後の効果を知る上で重要な基礎資料を得ることを目的とする。

## 2. 研究の方法

研究の方法をフローチャートに示したのが図-1である。市民参加による街づくりを行うため評価実験には、武蔵野市民148名を対象とした。景観提示にはスライドを用いた。スライドは武蔵野市の街路の中から9景、既存の東京周辺の代表的商業地景観8景、イラスト2景、画像処理により景観を変換したものを13景、計32景を用い、景観整備の方向性を探る調査と、構成要素と心理量の相関をもとめるアンケートを実施した。景観の修正は図-2に示す項目について行い、修正は計算機により行った。評価方法は、SD法(7段階評定尺度)を用いて16形容詞対を選定し評価を行った。

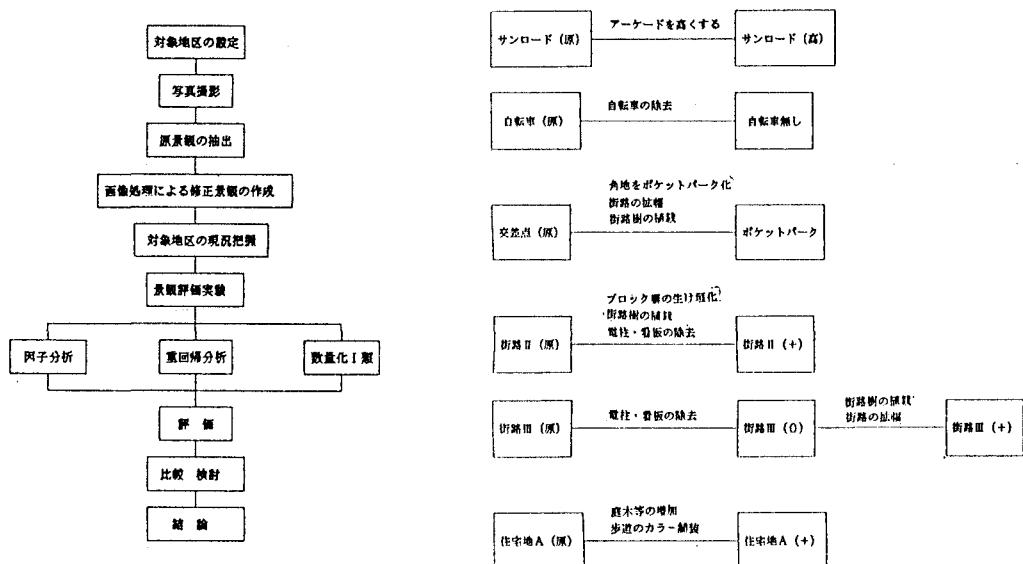


図-1 研究のフローチャート

図-2 画像の修景

## 3. 分析と結果

整備の方向性を分析するため、得られたデータをもとに各街路景観毎のプロフィール分析を行い、各街路の特徴を把握した。次に因子分析(バリマックス法)により、各尺度の因子負荷量及び因子寄与率を求めた。

その結果、第一因子軸をデザイン性、第2因子軸を人間味・親しみ、第3因子軸を活動性と名付けた。更に、各街路毎の平均因子得点を算出し2次元プロットしたものを図-3、図-4に示す。<吉祥寺大通り>・<吉祥寺駅前>はデザイン性はあるが、人間味・親しみに乏しく、<グリンパーク商店街>・<境北口>などは人間味・親しみの因子軸では高いがデザイン性は低いことがわかった。同様な方法により構成要素の分析も行った。第一因子軸を総合的評価、第2因子軸を活動性と名付け、第2因子軸まで累積寄与率が93.3%となった。プロット図を図-5に示す。これによると街路Ⅲ(原)から街路Ⅲ(0)以外はすべて第一因子軸の総合的評価が上がっているのが分かる。第2因子で評価が上がらなかったのは、電柱などを取り除いたためすっきりとした街路になったためと思われる。また、景観構成要素と心理量とを定量的に把握するために、構成要素と因子得点により数量化I類により分析を行った。そして、歩道幅員、緑視率等の構成要素と因子得点とから回帰分析を行い、心理量から見て適切な量を求めた。

#### 4. 考察

図-3から現在の武蔵野市の都市景観の位置付けが分かったが、これから今後、例えば吉祥寺大通り・吉祥寺駅前は人間味・親しみが増えるような開発をしていけば良いことが分かったが、どの様な構成要素を操作すれば人間味・親しみの心理軸を移動することが出来るかは構成要素と各因子得点とにより数量化1類によって分析した結果から分かった。

## 5. 今後の課題

景観整備を行うためには十分な交通基盤の確立がなくては不十分なものとなってしまう。現在、吉祥寺は慢性的な交通渋滞、歩行者導線の分断、駐車・駐輪場の不足等様々な問題があり、これらを考慮しながら景観整備を行うことが求められている。

なお、本研究は日本都市計画学会武藏野市都市景観調査委員会によるデータを利用させて頂いた。本研究にあたり、終始丁重なる御指導を頂きました委員の先生方に深く感謝致します。

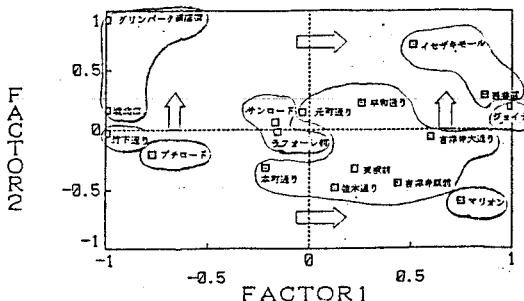


図-3 因子得点のプロット図 (F 1 - F 2)

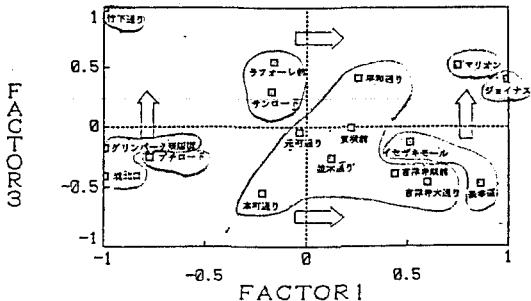


図-4 因子得点のプロット図 (F1-F3)

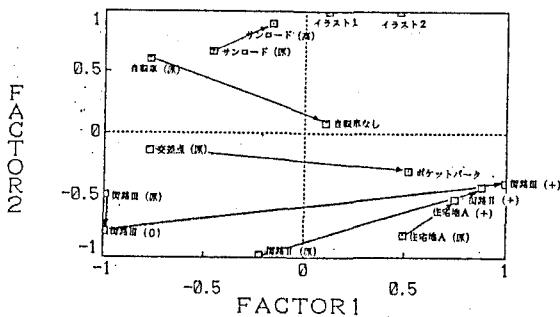


図-5 因子得点のプロット図 (F1-F2)